

第三百四回 青葉会

平成二十三年七月二十八日(木) 午後六時〜九時

丸紅来客食堂 (談話室)

☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 久米五郎太 小西弘子 豊田ゆたか

〈投句〉

橋口隆 福島正明 山内天牛
石川清 伊賀山そらお 小早健介(新人) 朱牟田恵洲 土谷堂哉 中野一灯
中山芳博 古田昇(新人) 南平和夫 宮内規雄 山崎亜也 渡邊盛雄
赤田堅 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 村田くに子 山崎青史

ゴシックは選者の天

《選者吟》

産土神(うぶすな)の茅の輪をくぐり留学へ 万里子 (紀・龍・允・く・青)
思ひ切り徒長枝を剪り暑氣払ひ 全 (五・く)
蓮ひらく雨粒まろぶ葉豊に 全 (弘)
絵日記へゴーヤ簾の影の濃く 全
夏燕飛び交ふ湖畔母郷行 全

《互選句》

八点

秋待つや産み月近き束ね髪

(☆まつ、つき、つかねと韻を踏んでいる)

一灯 (猛・恭・忠・五・弘・ゆ・く・天)

六点

☆ 信号を待つ身を入れて夏木立

かき氷明日の事は考へぬ

(青：もろく崩れるかき氷。季語が利いている)

隆 (万・堅・猛・弘・龍・允)
正明 (堅・紀・ゆ・隆・青・天)

五点

☆ ミシユランの星は付かねど泥鱸鍋

(青：ミシユランと泥鱸鍋の取合せが面白い)

昇 (堅・孤・弘・敏・正・く)
恵洲 (万・堅・ゆ・正・青)

四点

☆ 襟立ててボガード気分海霧(じり)の街

草木は暑熱を餌(え)に逞しく

昇 (堅・恭・猛・弘・隆)
猛 (堅・紀・恭・敏)

まづ鉦の音より祇園祭かな

背信の匂ひも少し白木槿

忠彦 (万・孤・敏・く)
弘子 (忠・五・ゆ・允)

三点

☆ 罹災地の家族招きて巴里祭

(☆中七↓家族を招き)

正明 (紀・孤・龍・天)
五郎太 (万・隆・正)

暑き日知らぬ名ばかりの寄席に居る
麩(はったい)や噎せつ笑ひつ兄いもと

(青：今は珍しい句材をすつきり詠んでいる)

恵洲 (恭・忠・敏)
堂哉 (猛・青・天)

☆ 帰省子や菜切包丁リズミカル

(☆：「や」↓「の」にして三段切れを防ぐ)

芳博 (万・く・天)

二点

隠しごとしたことの無いソーダー水

甚平も隠しきれないビール腹

正明 (恭・孤・弘)
そらお (猛・允)

千穉樂夏ばて弁慶声嘎れて

道南のじやがいもの花畝長し

紀久男 (隆・允)
猛 (五・天)

さるすべり木肌の落つる真昼どき

(☆落つる↓剥げる)

五郎太 (紀・正)
弘子 (孤・青)

稚児据ゑて鉦に命の点りけり
(青：稚児が綱を切らないと山鉦は動かない。その意味で稚児は山鉦の生命。命点るが上手い表現)
見舞状中にも涼しき女文字

恵洲 (忠・敏)

平成二十三年七月句会報

一、今回は万里子先生以下11名出席。投句は初参加の小早健介さん（伊丹の盛雄さんと同じ『季流』同人）二回目の古田昇さんを含め12名。

先生お手製のおつまみ、五郎太さんの「天狗舞」吟醸、龍平さんの御友人丹野敦雄さんの「出羽桜」大吟醸と純米吟醸を賞味しつつ開始。

御覧のように投句のお二人：一灯さん、昇さん。そして正明さん、隆さんが高得点でした。弘子さんの司会で快調に飛ばし20：30終了。珍しく時間余りましたので席題を10分で投句。もつと続けられたんですが節電で冷房が止まった為あつさり退散となりました。

当日の話題は勿論なでしこジャパンの大金星。そして三田完『俳風三麗花』の続編「草の花」（文芸春秋2011/5/25 ￥1,667）でした。

昇さんの六点句と弘子さんの四点句は祇園祭を詠んでおられます。マスコミでも報道されましたが、祇園祭の起源は貞観11年（869年）。京都では疫病蔓延、東北では3・11に匹敵する巨大地震・津波のあつた年とかで疫病退散、鎮魂のために始められた由です。

二、300回記念合同句集は三ツ目のミスプリント見つかりました。やはり小生の校正ミスです。謹んでお詫び申し上げます。

橋口隆さんの作品（37ページ）・・・歌↓歌

三、関係者近詠

うららかやスカイツリーへ鷗光り

万里子

万緑や軋む大地に身を委ね

盛雄

われ一人花下の写真に生残り

全

山鉾を牽く千年の古都絵巻

昇

行く春を判じ誦みゆく芭蕉句碑

全

緑陰や山の朝市賑へり

允章

春荒れや有能危険な人と核

全

風の径藪をはみだし今年竹

全

子連れより犬連れ多し子供の日

全

とびとびに鉄塔つづく青嶺かな

全

三代の嫁一卓に豆の飯

眞希子

冬眠の蝮兜太の筆太し

丹野敦雄

アマリス咲かせ商ひ守るのみ

全

疎らなる虚子の口髭花八手

全

新樹光還曆越えし解放感

全

紫陽花や格子戸越しにまかない場

全

強風に単線遅延つばくらめ

全

毒茸や性根を据えし傘の朱

全

墓の守る田より田植を始めけり

弘子

『立葵』第二集より

花の名を残らず呼びたき五月かな

全

実梅椀ぐ幼なの笹へ先づ一顆

奥西邦夫

海遠き海の名の駅薄暑光

全

『NHK俳句』八月号 大西悦子選

全

菖蒲湯に孫入る前の静かさに

和夫

老いてのちの疎開さびしき溽暑かな

盛雄

囀りや遠近法で聞えけり

忠彦

日経新聞7月31日 黒田杏子選

全

シャンソン・ライヴ

葉桜や歌手客共に姥盛り

紀久男

花糸瓜過ぎし昭和を呼び戻す

盛雄

『萬緑』8月号

全

毎日新聞7月20日 和田悟朗選（兵庫文芸）

初蝶の鳥獣戯画を出で来る

孤舟

薔薇咲くや長き苦難の路傍にも

健介

山宿の朝備長の火の涼し

全

『朝日新聞』7月19日 大串章選「大震災を詠む」

全

恋蛩追はれ星座へ紛れ込む

全

◎都々逸

小歌糸・中村淑子

花合飲の落暉の匂ひしてゐたり

全

青葉の句会は三百回よ

全

諦観を引き摺ってゐる蝸牛

全

どつしり座りし名人会

全

『爽樹』九月号

掛け声決まったオペラ座しんと

全

パリの月夜の酒に酔う

平成二十三年八月十日

紀久男記